

京都大学	博士（文学）	氏名	林 玄海
論文題目	カマラシーラの無自性性論証研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>般若経の空の思想を受けてすべてのものの空を説くナーガールジュナ（龍樹、150年から250年頃）の系統は中観派と呼ばれる。ナーガールジュナ自身は二つから四つに分けたすべての場合に対して過失を指摘することで、あらゆるものの非実在すなわち無自性、空を説いた。時代が下がり仏教論理学が発展するにつれ、中観派の論師の中にも論理学を積極的に導入し空性を論証しようとする者が現れる。その最初が、仏教論理学を大成したディグナーガ（陳那、480年から540年頃）と同時代に活躍したバーヴィヴェーカ（清弁、500年から570年頃）である。バーヴィヴェーカはディグナーガの整備した三支からなる推論式を構成し自立論証を用いて無自性性を論証しようとした。その推論式はチャンドラキールティ（600年から650年頃）から論理学上の問題点を指摘されるが、ディグナーガと並ぶ仏教論理学の巨匠ダルマキールティ（法称、600年から660年頃）が出た後は、中観派もその影響を強く受け、帰謬的な自立論証を認めチャンドラキールティの指摘した問題を回避しつつ自立論証を用いることになる。論者の取り上げるカマラシーラ（740年から795年頃）もその立場に立つ一人である。この頃の中観派は瑜伽行派の唯心説も世俗的に認め、ダルマキールティの論理学も採り入れながら精緻な議論を展開した。</p> <p>このような流れの中で中観派の用いた様々な無自性性論証は類型化され、インド仏教後期にあたる10世紀頃には四つないし五つに分類されるようになる。チベットでは五つの無自性性論証の起源はカマラシーラと理解されている。論者の表現を使って示せば、その五つとは「自身と他者と自他の両者と無原因から生起しないことを証因とする論証」（金剛片）と「有と無が生起しないことを証因とする論証」（破有無生）と「単一の原因から単一の結果が、単一の原因から複数の結果が、複数の原因から単一の結果が、複数の原因から複数の結果が生起しないことを証因とする論証」（破四句生）と「諸存在が縁起しているものであることを証因とする論証」（縁起）と「諸存在が単一の自性も複数の自性も持たないことを証因とする論証」（離一多）である。しかしながら、カマラシーラ自身は、無自性性論証をいくつにまとめたのか、あるいは各無自性性論証がどのような関係にあるのかについて必ずしも明確に言及しているわけではない。そのため、カマラシーラの中観思想を明らかにするためには、関連するカマラシーラの著作をすべて精査した上でその無自性性論証を解明する必要がある。</p> <p>カマラシーラの中観思想を知る上で重要なテキストは『中観光明論』（<i>Madhyamakāloka</i>）を含め、いくつか現存するが、その中で『真実光明論』（<i>Tattvālo</i></p>			

ka) の研究だけが十分に進んでいない。カマラシーラの中観思想を明らかにするには、カマラシーラの中観論書を網羅的に検討する必要がある、その点で『真実光明論』を扱うことには大きな意味がある。また、『真実光明論』と内容的に近いことが指摘されている『中観光明論』の研究も進み、同論を参考にしながら『真実光明論』を解説することが可能になっている。本論文は、このような状況を踏まえ、『真実光明論』を正面から取り上げ解説した上で、カマラシーラの中観論書を包括的に扱い、その中観思想を明らかにすることを目的としている。

本論文は、序論とそれに続く五つの章から成る。第一章では、カマラシーラの無自性性論証並びにその著作を扱った先行研究をまとめた上で問題点を指摘する。ここで指摘される問題点とは、カマラシーラの二段階の論証の理解に不十分な点のあること、五つの無自性性論証の中の「破有無生」の位置付けに問題があること、「勝義の点で」という限定句（以下「限定句」）の解釈が明確ではないことの三点である。これを踏まえて続く第二章以降の議論に移る。

第二章では、『真実光明論』がいかなる著作かを明らかにする。まず『真実光明論』に言及する先行研究を取り上げ、無自性性論証を扱うカマラシーラの著作の中で『真実光明論』だけがテキスト研究、思想研究ともに十分に進んでいないことを確認する。次に『真実光明論』のシノプシスを示し、その内容と構造を概観する。『真実光明論』とカマラシーラの他の著作の中で無自性性論証を中心に扱う『中観光明論』『一切法無自性成就』（**Sarvadharmāṅīṣvabhāvasiddhi*）の二著作との関係を論じ、理証と二諦説については『一切法無自性成就』より『真実光明論』が『中観光明論』の略本と呼ぶにふさわしいことが指摘される。さらに『真実光明論』に特徴的な議論を、『中観光明論』にも見られるがその内容が異なる議論と、『中観光明論』では内容的に扱われていない議論とに分けて示す。以上の考察により、『真実光明論』は基本的には『中観光明論』の理証による無自性性論証の検討と二諦説を取り上げた略本と位置付けられるが、『中観光明論』の内容をそのまま要略したものではなく、『真実光明論』自体で展開する議論も見られる。そのため、カマラシーラの中観思想を明らかにするには『真実光明論』の研究が必須であることが強調される。

第三章では、三点目の問題に関して、「限定句」及びその前提となるカマラシーラの二諦説が扱われる。論者はまずカマラシーラの二諦説について、何が戯論を離れた第一義的な勝義に位置付けられるのかを検討し、第一義的な勝義の対象には、*Karmadhāraya*複合語解釈と*Tatpuruṣa*複合語解釈の二つの複合語解釈を通して説明される「法無我と人無我という特徴を本質とする真実」が該当し、第一義的な勝義の智慧としては仏や菩薩の出世間智、一切智者の智慧、世尊たちの瑜伽行者の直接知覚が挙げられることを指摘する。続いて「限定句」

との関連が指摘される正智 (samyajñāna) を取り上げ、カマラシーラが「限定句」をどのように解釈するかを扱う。正智は、聞思修より成る般若という第二義的な勝義に加えて、戯論を離れた出世間智や一切相智者の智慧という第一義的な勝義としても見られること、さらに、「限定句」の理解について、カマラシーラが「真実として吟味するなら」という対象の側面と「正智〔の意図〕で」という主体の側面という二つの観点から解釈する点が指摘される。最後に、カマラシーラ以外の「限定句」を解説する中観論師としてバーヴィヴェーカ (Bhāviveka, 500–550年頃)、ジュニャーナガルバ (Jñānagarbha, 8世紀頃)、アヴァローキタヴラタ (Avalokitavrata, 8世紀頃) を取り上げ、カマラシーラに至るまでの「限定句」の解釈の変遷が検討され、その共通点として、「限定句」を第一義的な勝義と戯論を伴った第二義的な勝義のどちらとしても使用すること、「限定句」の解釈が推論式に使用される第二義的な勝義としての「限定句」を説明する文脈で見られることが挙げられる。また、「限定句」に対象の側面と主体の側面と二種の解釈が見られる点について、主体の側面からの解釈は、バーヴィヴェーカ以来の主要な解釈であることに加えて、「勝義の点で不生」などの表現に対する批判に回答するために使用される一方、対象の側面からの解釈には、不生などの推論式で証明される対象が勝義であることを強調するために「限定句」を対象の側面から解説する意図があることが指摘される。そして、対象の側面からの解釈を明確に示すのはカマラシーラからであるとし、ここにカマラシーラの「限定句」解釈の特徴を見出す。

第四章では、問題点の二点目の「破有無生」の位置付けが検討される。まず、先行研究間にあるその位置付けの相違の問題を解消する。論者は、一般に「破有無生」とされる箇所を、当該論証そのものに加えて、「縁起」に関する論証である「縁起1」「縁起2」、そして世俗としての生起を拒斥するのか（以下「拒斥」）という四つの主題に区分して検討する。四つの主題に基づく議論は、『中観光明論』では「破有無生」から展開する一連の議論と考え得るが、『真実光明論』を考慮すると、「拒斥」といった「破有無生」から展開する箇所は必ずしも「破有無生」を前提とはしていない議論であることを指摘する。さらに、「破有無生」の位置付けを「金剛片」との関係を中心に検討する。先行研究では「破有無生」を「金剛片」中の「自身からの生起の否定」（以下「自不生」）に位置付ける。しかしながら、カマラシーラの著作には「破有無生」を「金剛片」の「自不生」に位置付ける根拠が見られない。そして五つの無自性性論証のうちカマラシーラが世俗の観点で生起を認めるのは、「他者から生起することの否定」（以下「他不生」）の一部、並びにそれと関係する「破四句生」「縁起」であり、「破有無生」で中心となる議論が世俗の点で認められる無の結果の生起であることから、「破有無生」は「金剛片」中の「他

不生」と深く関連する論証であるとする。また、カマラシーラ以前の中観論師の中から「金剛片」と「破有無生」を関連させるバーヴィヴェーカとチャンドラキールティを取り上げ、分類の数に相違はあるものの、両者が共通して「他不生」と「破有無生」を関連させることを指摘する。

第五章では、カマラシーラの無自性性論証における無常と常住の分類について、問題点の一点目である二段階の論証と関連させて議論する。はじめに、『中観光明論』と『真実光明論』に見られる二段階の論証について考察し、『中観光明論』における二段階の論証が、無常と常住の自性を考察対象として、それを証明する正しい認識手段が存在しないことを示す「破無常常住」と、両方の自性を拒斥する「金剛片」より成ることを確認する。一方、『真実光明論』における二段階の論証は、一段階目に認識の問題が含まれる点、二段階目が「金剛片」と常住な存在を否定する論証に分類される点に特徴があるが、基本的に『中観光明論』と一致することを確認する。以上のように、論理による無自性性論証では、無常と常住の自性を否定する二段階の論証がカマラシーラの無自性性論証において重要である点を確認する。さらに二段階の論証の起源について、バーヴィヴェーカの著作に見られる無自性性論証と関係のある可能性を検討する。はじめに、カマラシーラの立場が必ずしもバーヴィヴェーカと同じとは限らないことを明らかにするため、「金剛片」中の「無原因」を取り上げる。バーヴィヴェーカは『般若灯論』の中で無原因（ahetu）を悪因（*kuhetu）と解釈し、それをチャンドラキールティが批判することから、当時からバーヴィヴェーカが無原因を悪因と解釈する点に批判が見られることを確認し、一方で、カマラシーラは無原因を悪因と解釈することに対する批判に回答せず、自身で無原因を悪因とも解釈しないことが指摘される。そして、カマラシーラの立場は、基本的にはバーヴィヴェーカの見解を継承しながらも、それに対してカマラシーラ自身の解釈を施すと想定しうるといふ。次に、カマラシーラの二段階の無自性性論証とバーヴィヴェーカの無自性性論証との関係が考察される。『中観心論頌』第三章におけるバーヴィヴェーカの無自性性論証を取り上げ、諸存在を有為と無為とに分けてそれらが自性として存在するのかを検討する一段階目と、「金剛片」によって諸存在の生起を否定する二段階目によってなされるとみなす。最後に論者は、カマラシーラとバーヴィヴェーカの著作に見られる二段階の論証について比較する。両論師の二段階の論証は、一段階目でバーヴィヴェーカは有為と無為、カマラシーラは無常と常住に分類して検討する点、そして二段階目で「金剛片」を使用する点で共通している。両者の二段階の論証には相違する点も見られるが、二段階の論証の構成が類似し、しかも二段階で無自性性を論証する方法が他の中観論師には見られないことから、カマラシーラがバーヴィヴェーカの二段階の論証を参考にした上で、

カマラシーラ独自の無常と常住の自性を否定するための二段階の論証を構成したと想定しうる可能性が提示される。さらに、カマラシーラの著作において無常と常住の分類がどのように使用されているかを、教証と五つの無自性性論証の二点から検討し、経典による無自性性論証でも、勝義の点で存在するものが無常もしくは常住の自性を持つものに分類され、いずれの自性もないのが正しい般若とされるという。次に五つの無自性性論証について、「金剛片」中の「他不生」が特に重要であることを確認した上で、「他不生」には共通して無常と常住の分類が利用されることを指摘し、最後に、カマラシーラが無常と常住を使用する理由として、ダルマキールティが設定するお互いに排除しあって存続することを特徴とする矛盾をカマラシーラが論証に適用する点にあるという。

本論文によって明らかになった中観派としてのカマラシーラ思想は、以下のようにまとめられる。まず、「限定句」に関するカマラシーラの特徴は、カマラシーラ以前は明確には使用されていなかった対象の側面から解釈することにある。すなわち、論理などによって考察された対象も勝義としてふさわしいことを強調するために、カマラシーラは対象の側面からの解釈を明確に示したと考えられる。次に無自性性論証については、従来カマラシーラの無自性性論証を扱う際には、カマラシーラ以前の議論を整理したとされる五つの無自性性論証に焦点を当てた研究が大半であった。しかしながら、カマラシーラの主著である『中観光明論』、さらに同論書における論理による無自性性論証をまとめた『真実光明論』を考慮した場合には、カマラシーラの論理による無自性性論証では、自性を無常と常住に分類した上で、「破無常常住」と「金剛片」という二段階の論証により一切法が無自性であると証明するという方法がその中心である。カマラシーラが無自性性を論証する際には、この無常と常住という分類が重要な観点である。また、この二段階の論証はバーヴィヴェーカの無自性性論証から影響を受けた可能性が考えられる。「無原因」の例にも見られるように、カマラシーラはバーヴィヴェーカの無自性性論証をそのまま継承しているわけではない。しかし、バーヴィヴェーカの示した推論式を擁護することや、二段階の論証においてバーヴィヴェーカの論証を参考にした可能性があることを考慮した場合には、バーヴィヴェーカが無自性性を論証する方法を参考にしながら、カマラシーラ独自の解釈を加えるという態度を想定することができる。

(論文審査の結果の要旨)

般若経の空の思想を受けてすべてのものの空を説くナーガールジュナ（龍樹、150年から250年頃）の系統は中観派と呼ばれる。ナーガールジュナ自身は二つから四つに分けたすべての場合に対して過失を指摘することで、あらゆるものの非実在すなわち無自性、空を説いた。時代が下がり仏教論理学が発展するにつれ、中観派の論師の中にも論理学を積極的に導入し空性を論証しようとする者が現れる。その最初が、仏教論理学を大成したディグナーガ（陳那、480年から540年頃）と同時代に活躍したバーヴィヴェーカ（清弁、500年から570年頃）である。バーヴィヴェーカはディグナーガの整備した三支からなる推論式を構成し自立論証を用いて無自性を論証しようとした。その推論式はチャンドラキールティ（600年から650年頃）から論理学上の問題点を指摘されるが、ディグナーガと並ぶ仏教論理学の巨匠ダルマキールティ（法称、600年から660年頃）が出た後は、中観派もその影響を大きく受け、帰謬的な自立論証を認めチャンドラキールティの指摘した問題を回避しつつ自立論証を用いることになる。論者が取り上げるカマラシーラ（740年から795年頃）もその立場に立つ一人である。この頃の中観派は瑜伽行派の唯心説も世俗的に認め、ダルマキールティの論理学も採り入れながら精緻な議論を展開した。

このような流れの中で中観派の用いた様々な無自性論証は類型化され、インド仏教後期にあたる10世紀頃には四つないし五つに分類されるようになる。チベットでは五つの無自性論証の起源はカマラシーラと理解されている。しかしカマラシーラ自身は五つの論証を数えることもなく、論証に名称を付けて呼ぶこともない。本論文は、これまで研究の遅れていたカマラシーラの『真実光明論』（Tattvāloka）のチベット語訳の批判的校訂と訳注を付し、関連するカマラシーラの著作を網羅した上で、そのカマラシーラ自身の無自性論証を包括的に検討し、カマラシーラの中観思想を解明しようとした意欲的な論文である。

本論文は、序論とそれに続く五章からなる。第一章では、先行研究の問題点を指摘した後、『真実光明論』以外のカマラシーラの現存する著作を概観し、本論文と直接関係する著作を確認する。第二章では、無自性論証を扱うカマラシーラの著作の中で『真実光明論』の研究が進んでいないことを確認した上で、『真実光明論』の内容を概観する。そして、その他のカマラシーラの著作との比較からカマラシーラの著作中の『真実光明論』の位置づけを確認し、その研究の必要性を示す。第三章以降では、第一章で指摘された問題点が詳細に検討される。第三章では、推論式の中の「勝義の点で」という限定詞を取り上げ、カマラシーラの二諦説の詳細な検討と先行する論師の限定詞解釈との比較から、限定詞を対象の側面から解釈する点にカマラシーラの特長を見出す。第四章では五つの無自性論証の一つ「有と無が生起しないことを証因とする論証」（破有無生）に関わる問題を取り上げ、「自身と他者と自他の両者と無原因から生起しないことを証因とする論証」（金剛片）の中の他不生と深く関わることを指摘する。第五章では無自性論証の中に出る無常と常住の分類に注目しつ

つ論者が二段階の論証と呼ぶ論証方法について詳細に論じている。そして、カマラシーラの論理による無自性性論証について、無常と常住に分類した上で自性を否定し「金剛片」に移る点にその特徴を見出す。さらに、類似する無自性性論証をバーヴィグヴェーカの著作の中に指摘し、カマラシーラがそれを参考にした可能性を提示する。

本論文の意義は三つある。まず『真実光明論』のチベット語訳テキストの校訂と訳注を作成し、カマラシーラ研究の基盤を整備したことである。これまでのカマラシーラ研究では、主著とみなされる『中観光明論』と類似する内容を持つ『真実光明論』は補助的に利用されてきたにすぎない。それは『真実光明論』が韻文からなり、チベット語訳しか現存しないため、『中観光明論』より難解であったことも理由である。論者は、『中観光明論』を中心にカマラシーラの他の著作から平行箇所を丹念に探し出し、副論文として校訂テキストと訳注とともに、平行箇所を『真実光明論』の偈頌の順にまとめた。このことは本論文の信頼性を高めるだけでなく、続くカマラシーラ研究者にとっても重要な研究基盤となり得るものであり、特筆に値する。

第二に、本論文が関係するカマラシーラ的全著作を網羅的に検討した上で、その無自性性論証を論じたことである。これは『真実光明論』を正面から取り上げ、その独自性を明らかにした上でカマラシーラの無自性性論証の解明に取り組んだからこそ初めて可能になったものであり、本論文の特色の一つに数えられる。それによって、先行研究に修正を迫りつつ、カマラシーラの無自性性論証の特徴を詳細に描き出すことに成功しており、本論文の重要な意義の一つに数えられる。

第三に、カマラシーラに先行する論師の影響についても新たな知見を提示したことである。論者はカマラシーラの無自性性論証を中観派思想史上に位置付けるために、先行する重要な論師にも目を向けつつ詳細に検討しており、この点も今後の中観派研究において参照されるべきものとなるはずである。

しかし、本論文に問題がないわけではない。まず、全体から見れば数は少ないが、訳語の選択や想定されるサンスクリットの注記も含め、和訳には修正が必要な点が残る。さらに仏教論理学に関する先行研究に対する目配りが不足している点が見受けられる。また、カマラシーラの無自性性論証にもさらに踏み込んで論じることができたかもしれない点があったことは惜しまれる。けれども、これらの点は論者自身も自覚しており、今後のさらなる研鑽により解消されるはずである。それによって本論文が緻密なカマラシーラの無自性性論証を詳細に論じた価値が損なわれることはない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和3年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。